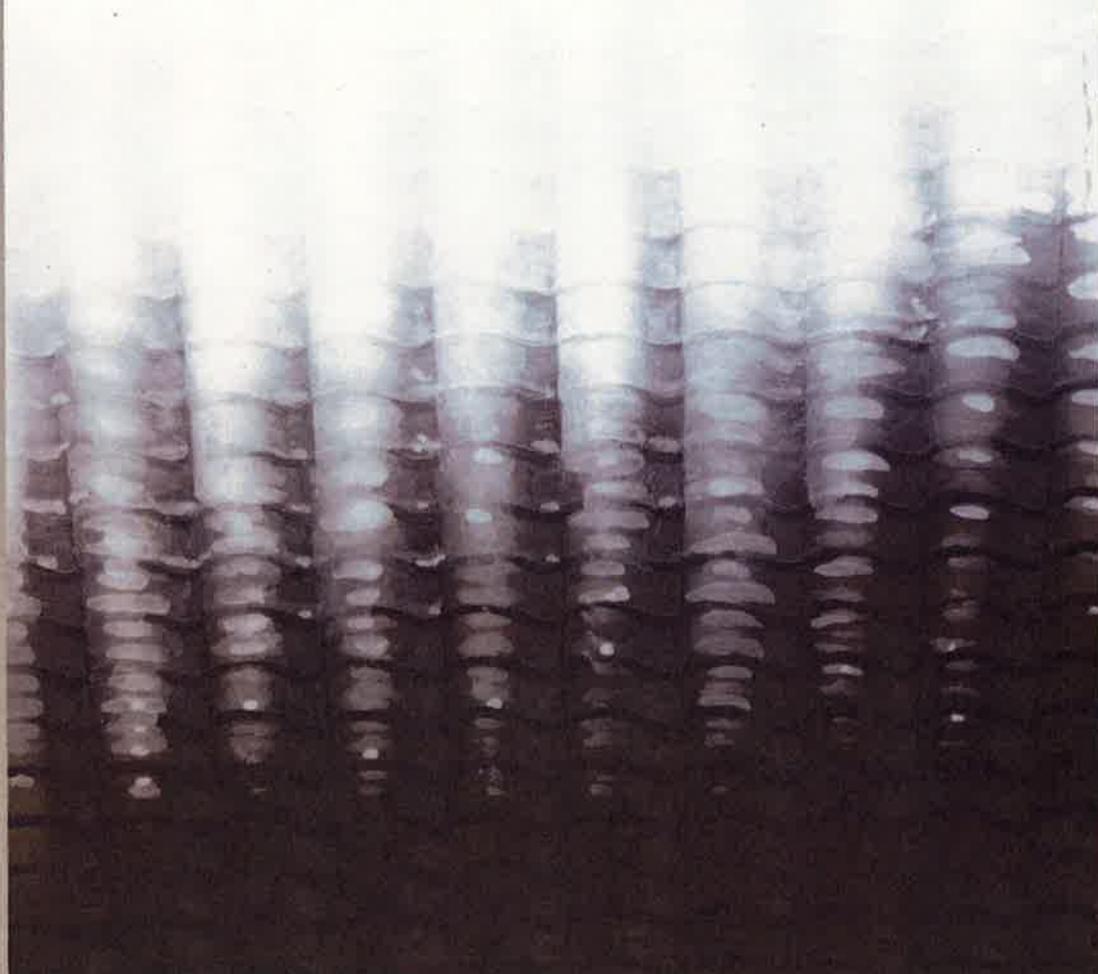


# 文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
平成三十年二月一日発行(毎月一回)日発行  
第九十六巻第二号二月十日発売

**特別対談** 小泉進次郎×塩野七生 <sup>95<sup>th</sup></sup>  
文藝春秋  
平成29大事件の目撃者/貴乃花と白鵬 二月号



MAG-TAC LED

701-02



4910077010283

00815



Printed in Japan

# 將軍の世紀

やまうちまさゆき  
山内昌之

歴史学者・  
東京大学名誉教授

新連載

## 「第二回」不思議な戦争 関ヶ原合戦

戦場での臨機の決断力にこそ、  
稀有の軍人政治家・家康の真骨頂がある



(上) 家康に天下を取らせた黒田長政  
(下) 西軍の総大将となった毛利輝元

(福岡市博物館所蔵)  
(毛利博物館所蔵)

或る武将の回顧――

関ヶ原の一戦の前、東から徳川方として美濃路に馳せ上った朋輩の多くは、太閤秀吉の御取立大名であった。その時に、「我等」（私）が心変わりして大坂方と手を組んでいたなら、福島正則、加藤嘉明、浅野幸長、藤堂高虎なども悦び勇んで、共に別の道を進むことも「案の内」（考えの範囲内）であった。この者たちが西軍（大坂方）に加わり、島津義弘と私が先陣となって攻撃に出たなら、他の東軍（徳川方）は一戦に及ばず敗北するのも明白だったかもしれない。大勢は大坂方となったに違いない。日和見を決め込んだ諸国の大名小名のすべてはこの知らせを聞いて、大坂方に参陣したに相違ない。だからこそ、家康公も我々の心根に疑いを抱き、人馬を連れて百里以上にもなる大敵相手に、徳川軍の先鋒として井伊直政や本多忠勝だけを遣わし、その後、外様の諸將に二心がないことを見届けてようやく出馬されたのだ。

だとすれば、私が諸大名を誘って、島津、福島、加藤、浅野、宇喜多秀家を先陣に東へ押し寄せたなら、東軍はこれらの者に快勝できたであろうか。家康公は弓矢に秀でた長者であるにせよ、御自ら先鋒になられる以外に仕様がなかったであろう。万一、先の武将たちがなお東軍に留まったとしても、私が西軍に加わったなら、毛

利家や小早川秀秋などは安心して、先んじて大坂勢の味方になっていたはずだ。島津、私、宇喜多などが諸兵力を動かし、先陣で打ち出せば、東軍の岐阜城攻めはもちろん、誰ひとりとして美濃路で手向かいできるはずもなかった。ほうほうのていで関東へ引き揚げるのが関の山というものだ。これらをわけなく追い払えば、諸国の大坂方は日を追って決起したに違いない。さすれば、家康公も箱根より西に御出馬することは思いもよらなかった。

### 一、日本を変えた一日

これは徳川家康に天下をとらせた大名の極秘遺言の大意である。私が一部を補足しながら現代語に訳してみた。原文で「我等」や「某」とある書き手は、誰であろう黒田長政にほかならない。長政の文章は、自分が西軍に加担した場合を仮定しながら、慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦前後にありえた政情の緊迫感を描いている。長政は、勝利の功労で家康から与えられた筑前一国を「誠に大分の御加恩」ではあるが、家康に尽した「大功」と比べれば「相当の御恩」とは言い難いと不平不満をもらし、父如水（官兵衛孝高）も合戦の折、九州を平定したのに領地の拝領を辞退した事実に触れる。時も過

ぎれば、黒田の子孫もあやまちや「国家の大事」を犯すかもしれない。そうなった時には、父祖の大功を言いたて徳川には貸しがあることを踏まえて処置せよ、と家老二人に対してその子孫だけに密かに相伝すべし、と命じたのだ（黒田長政遺言『家訓集』）。何とも放胆な遺言というほかない。大事なものは、長政の文章には関ヶ原合戦の本質がよく窺えることだ。

関ヶ原の合戦は「不思議な戦争」である。徳川家康を権力の頂点に押し上げた天下分け目の戦は、慶長五（一六〇〇）年九月十五日に、わずか一日もかからずに終わった。これは日本の政治地図を塗り替える一大決戦でもあった。紀元前五世紀のペルシア戦争は大規模な戦役であったが、二度の海戦と二度の陸戦とで「東の間」に勝敗が決してしまった。歴史家トゥキュディデスの使った「東の間」の意味には、関ヶ原合戦における「瞬時」の決着よりはるかに長い時間の幅がある。

真田昌幸や黒田如水は、関ヶ原合戦を機に東西対決の持久戦争が長引くと予想した反面、徳川家康は多角的政略と機動的戦術を結びつけた柔軟な戦略によって決戦をわずか一日で片づけてしまった。そして、家康の戦略にいちばん貢献した武将こそ黒田長政なのである。本人によれば、当日の奮戦などは「珍しからざる事に候」、最大の